

デ

イサービスなどの高齢者施設は、こども落語のお得意さんだ。大半は施設側からの依頼だが、こちらからお願いしてやらせてもらう場合もある。たまたま平日に時間ができ、週末の寄席に向けて実践しておきたいときなどがそれだ。模擬試験のようなものだが、中高生が模試だからといって手を抜かないように、こども落語だって区別などしない。だからつてわけでもないのだけど、「今日なんですかいいですか？」など言う押し売りまがいの依頼にも応じてもらえるところがいくつもある。うちの教室の財産と言っている。

ただし、八十歳から百歳代の聴衆のみだから、いつもとは勝手が違うことを想定しておく必要がある。まず、少なからず聞こえていない人がいる。それなのにマイクを常備している施設は少ない。いちいち利用者と会話するのにマイクを握るわけにもいかないだろうから当然ではあるが。聞こえない人たちは、どうしても話し声が大きくなり、こどもたちが落語を一生懸命語っている最中でも、「あんた聞こえーかね（聞こえてる？）」「あたしや

全然聞こえんよ」などの会話が音量を絞られることなく、平然と行われたりする。

さらに、ふだんの寄席なら必ずどつと笑いが起きるところでもシンとしているなんてこともある。そういうときは、笑いもせずじつと話を聞くのはさぞかし苦痛であろう、と心配になったりもするのである。

ところが、先だって、某デイサービスに行ったときのこと。だいたいこのデイサービスも行くのは午後2時半。昼寝の終了時刻である。起き出してテーブルへと移動が始まるのを合図に準備をし、席が埋まると寄席を始める。中には覚醒に及ばず座ったまま昼寝を続けている人もいる。その日はこどもたちの目の前、最前列で午睡を続ける老人がいた。寄席の間、一度も目覚めなかった。ところがその老人、終わってこどもたちが利用者として一人一人握手をして回ると、やおら目を覚まして握手をし、その後号泣したのである。

この人にとっては落語よりもはるかに一回の握手に意義があったのだ。落語で福祉に貢献、と思ってきたのだが、もつと大事なことを見落としていたのではなか、と考えさせられた。

老い老いに
木幡智恵美

74

〇〇八年の夕焼け通信は六九〇号から始まる。「ニュース日記」「ゴジラの足跡」「ど素人出版日記」、そして私の「専業主婦一年生」。何と、今の常連メンバーによるものではないか。それに、「団塊のひとりごと」「療養日記」、おなじみの詩作者が詩を投稿し、タイ事情が加わり、二〇〇七年度の最終号はきつかり七〇〇号で締めくくっている。

年が明けてしばらくして娘が職場に復帰し、元の日常に戻ってきた。この頃の私は、講習を終えて実際に点訳を始めている。挿絵ライターの通信講座も受講し、課題提出の際には画用紙の前に悪戦苦闘していた。あわよくば、良い判定をもらって仕事にありつこうと考えていたのだ。畑の方はたまに収穫に行くだけで、その分時間が空く。そんな折、新聞のチラシにあった求人広告が目にとまった。短期のアルバイトでもしてみるかという気になったのだ。

思い切って連絡したのはある派遣会社。夫と一緒に向いて派遣登録をし、以後何度か仕事を請け負うことになる。初めての仕事は試験監督で、事前に配られたマニュアルをしつかり頭に叩き込んで臨む。マイクを持って進行する役は夫の方が先に当たった。私も同じ役に就いたことがあるが、かなり緊張する。それでも、毎日のんびりしすぎる生活をしているせい、その緊張感がかえって新鮮で、二人とも妙にハッスルして出かけたものだ。その後も弁当配りなどいろいろな仕事に出、顔なじみも出来ていった。

目指していた挿絵ライターは、仕事をもらえる一級、二級には及ばず、家でできる仕事をするといい夢は諦めた。思えば、学校を卒業してからずっと働き続けてきている。仕事漬けの癖が抜けないのか、だからだらした生活に張りや欲しいのか、一度始めたアルバイトをきつかけに、広告を見ては応募をし、時には二週間、時には一か月半とアルバイトに出かけるようになっていく。臨時収入が入るのも嬉しいものだ。口座振り込みが当たり前になっていくから、現金を手で受け取ることがより有難く感じる。夫は、しばらくやってやめたけど、私の方はずいぶん仕事に出だし、期間も長くなっていく。フルタイムではないけれども、あるところでは二年二箇月、最後は四年二箇月と、定年の六十歳を迎えた次の三月まで働くことになった。



30代フリーター 自国から遠いイランへのアメリカの武力攻撃は、西半球への資源の集中を目指すトランプの「ドロー主義」にも反するのではないか。年金生活者 イスラエルの最大の脅威を除去することで、中東への介入にもなう米国の負担を減らすのが攻撃の狙いだとすれば、ドロー主義に沿っているとも言える。ドロー主義は、世界の覇権国家、すなわち「世界帝国」の座からずり落ちつつあるアメリカが、これまで世界中に築いてきた「帝国」の軍事的、政治的、経済的な足場をリストラするためのイデオロギーだ。足場の代表的なものが軍事同盟であり、NATO加盟諸国や日本に対して、同盟維持の負担の増大をアメリカに代わって担うように求めているのもリストラの一環だ。

トランプは、これまで海外の「帝国」の足場に注ぎ込んでいたリソースを自国に振り向け、「アメリカを再び偉大に(MAGA)」することを政権の使命としている。それは「世界帝国」を西半球の「地域帝国」に縮小することを意味する。

トランプの進める「帝国」のリストラは、だれが政権を握っても進めざるを得ないアメリカの課題だ。トランプはその速度を人為的に上げようとして、「法の支配」を無視し、武力に訴える。

30代 1期目のトランプは「自分は新たな戦争を始めなかった大統領だ」と自賛した。2期目に入ると「平和の構築者」を自称し、7つの戦争を終わらせたと豪語した。実際にしていることは、ベネズエラ襲撃、イラン攻撃と、言葉とは裏腹の振る舞いだ。

年金 彼が「自分は始めなかった」と主張する「新たな戦争」とは、世界の警察官としての武力行使を指す。テロ退治のアフガニスタン戦争や大量破壊兵器の除去が名目のイラク戦争はその種の戦争に該当する。それは「世界帝国」としての警察行動だった。その座から降りて自国を「地域帝国」に縮小していくためのリストラを進めるトランプには、そんな戦争は持ち出しを増やすだけの障害物でしかない。

それに對し、ベネズエラ襲撃やイラン攻撃は、西半球を勢力圏とする「地域帝国」を守るための武力行使であり、「力による平和」の実現ということになる。

30代 アメリカがイスラエルの言うことをよく聞き、国際法違反の武力行使にも寛容な理由のひとつとして、両国の建国の経緯の相似性をあげる見方がある。アメリカはピューリタンの英国人らが先住民から奪った土地の上に建国され、イスラエルはシオニストのユダヤ人が先住のパレスチナ人から奪った土地の上に建国された、と。

年金 そのとらえ方は両国の建国を「入植者植民地主義」と呼ばれる植民地主義の形態のひとつとして見る立場で、米政府や主流の外交政策専門家のとらえ方とは異なる。だが、トランプ政権、ネタニヤフ政権による容赦のないイラン攻撃を目の当たりにすると、植民地主義がその根幹にあると考えないわけにはいかない。

30代 イラン攻撃をめぐって、日本政府は「イランによる核兵器開発は決して許されない」とする外相談話を発表した。同盟国のアメリカに気を遣うにしても、せめて「当事国はただちに戦闘を停止し、交渉のテーブルにつきべきだ」くらい言えなかったのかと思ふ。

年金 日本はそれを言える明確な法的根拠を持っている。国際紛争を解決するのに武力は使わないと宣言した憲法があるからだ。

憲法の前文は「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようとして、名譽ある地位を占めたいと思ふ」とうたっている。政府はそれを実行に移す義務があり、戦争や戦闘の当事国には紛争の解決に武力を使わないよう求め続けなければならぬ。

戦火を交えている当事者たちは簡単には耳を貸さないだろう。それでも「私たちは戦争も武力による威嚇も武力の行使も永久に放棄した。だから、あなたたちもそうしてほしい」と繰り返し訴えることで、少なくとも日本に對する安心感を相手に与えることができる。それは憲法9条の持つ「無防備」の抑止力を高めることにつながり、日本が生き延びる道を広げるはずだ。

ヨーロッパの植民地主義の起源は、15世紀末からの大航海時代にある。1492年にコロンブスがアメリカに、1498年にヴァスコ・ダ・ガマがインドに到達した。羅針盤の発明、天文航法の発達が可能にし、植民地貿易、遠隔地貿易を利潤の源泉とする商業資本主義の発展を促した。同時期に西欧に成立した絶対王政国家は常備軍の軍事力でそれをあと押しする「重商主義」政策をとった。

資本主義はその後、第2次産業中心の産業資本主義、第3次産業中心のポスト産業資本主義の各段階を経て、今ふたたび商業資本主義に回帰しつつあると見ることが出来る。国家が先端技術の開発を直接あと押しし、軍事力をバックに資源などの供給網の確保をはかる「ネオ重商主義」が各国政府の基本路線となった。それを最も露骨かつ性急に実行しているのがトランプだ。重商主義は植民地主義と一体であり、トランプ政権の振る舞いはその歴史と共振している。

ニュース日記 1007
中村 礼治

イラン攻撃について